



市民の声を市政に反映

杉森ひろゆき

市議会議員ニュース

杉森弘之後援会広報委員会発行

743号 2019年1月22日

〒300-1235 牛久市刈谷町1-41-8

TEL・Fax：870-0335

携帯：090-5587-7693

Mail：sugimori@max.hi-ho.ne.jp

牛久シャトーの事業撤退対策

要望活動の強化

第4回定例会一般質問 ②-A

杉森議員は12月11日、牛久市議会第4回定例会で、①市長公約の進捗状況、②牛久シャトーの事業撤退対策、③駅前のムクドリ、④東海第2原発の再稼働の危険性について、一般質問しました。今号では②のAを掲載します。

オエノンホールディングス

【杉森議員の質問】報道によれば、牛久シャトーを所有するオエノンホールディングスは、グループ会社の合同酒蔵が園内で展開する飲食・物販事業から12月28日にも撤退する予定とのことです。牛久シャトーは、市内中心部に位置し、市民の大切な憩いの場ともなっ



ている重要文化財であり、年間40万人の観光客を集める、重要な観光施設です。

そこでまず、オエノンホールディングスへの働きかけ、あるいは協議の経過について質問します。市長のトップ会談などの予定は、どの程度詰まってきたのでしょうか。

市民の声を届ける

【環境経済部長の答弁】長年、市民に愛されてきた牛久シャトーは、牛久市の観光の拠点でもあり、市の象徴的施設であることから、一企業の経営の問題として捉えるのではなく、牛久の象徴を現在の状態で継続できるよう、あらゆる可能性を模索し、市が積極的にかかわることができるように取り組むべきであると考えています。現在、まず市民の声を相手側にお伝えするため、事業の継続を求める嘆願書を市内外の関係団体から募っており、オエノン側に撤退の撤回を求める取り組みを進めているところです。

誠意を持って粘り強く

【杉森議員の質問】対策としては、要望活動と協力関係などの強化が必要と考えます。まず要望活動については、事業継続・再開を

東海第2原発20年運転延長の危険事故が起きたら避難できるの？



原子炉の構造などの科学的分野から、原発事故の歴史、各地の原発裁判、除染・がれき処理など、幅広い分野で活躍中の方です。

講師：山崎 久隆 氏

日時：2月10日(日)午後2時開演

会場：牛久市生涯学習センター大講座室

主催：原発いらない牛久の会

資料代：300円

技術革新と公共交通

ハードもソフトも

報道によれば、クルマは自動運転車や空飛ぶクルマなどのハードの技術革新が進むだけでなく、ライドシェアなどソフトの革新も進む、という。

自動運転車では、日産が「Easy Ride (イージーライド)」と呼ぶ新サービスの試験は昨年、横浜・みなとみらい地区の公道約4.5kmの限定コースで行い、300組の参加者は、スマホに取り込んだ専用アプリで目的地を決めて車を呼び出し、乗車して移動、降車するまでの流れを体験した。

求める市民の声を大きく継続的に組織していく必要があるのではないのでしょうか。要望において必要なことは、誠意を持って望むこと、そして粘り強く望むことではないのでしょうか。場合によっては、市内だけにとどまらず、幅広く支持してくれる人々の声も組織することになります。要望活動のこの間の成果と、今後の見通しについて質問します。

【環境経済部長の答弁】 杉森議員ご指摘のとおり、撤退の決定が撤回されない場合は、要望活動が長期となる懸念もあります。多くの市民の皆さまが今回のことに心を痛めており、さまざまなご意見が市に寄せられています。また、署名活動が始まっているとお聞きしており、これが実現した場合には、多くの牛久市民の願いをオエノン側にお伝えできると考えます。

今回の問題の一番大切な部分は、市民の皆さまの牛久シャトーに対する思い入れが大変大きく、単に観光施設やランドマークの閉鎖にとどまらず、ふるさと牛久の象徴が失われようとする中、本施設の存在意義をオエノンに再確認していただき、牛久シャトーが牛久シャトーであり続けられるよう、オエノンと牛久市と市民が一体となって考えていけるようにすることであると確信しています。



水上を飛ぶクルマ

自動で空を飛べるようになると、専門知識が必要なパイロットが必要なくなり、モビリティの用途が一気に広がる。『空飛ぶタクシー』として渋滞を飛び越えることもできるし、災害で寸断された地域に物資を運んだり、離島のけが人を街の病院に運んだりすることも簡単にできるようになる。

所有するから利用するへ

日本総合研究所の井上岳一氏によれば、2025年には団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になり、マイカーを運転する人は減り、クルマは所有するものから利用するものになる、という。

公共交通乗り放題も

先行するフィンランドでは、タクシーは1回5kmまで、公共交通はすべて乗り放題という月6万円の定額サービスもあるという。

同じくフィンランドで誕生したMaaSは、16年にその具現化として「Whim (ウィム)」という名前でサービスを開始した。定額料金でポイントを購入し、アプリで目的地を指定すると、移動経路が表示され、使用する交通手段によってポイントを消費する。電車、バスの他、タクシーやレンタサイクルも網羅し、予約手続きも自動的に行う。説明は面倒だけど、使ってみたら便利だよ、というサービスだ。

マイカーに頼らない街づくり

自治体には、今後はマイカーに頼らない街づくりを進めるという覚悟が求められる。